

水野稔先生関係資料の寄贈について

——『購入和書覚帳』ほか——

内村 和至*

はじめに

二〇一八年夏、明治大学中央図書館ギャラリーで、第七七回中央図書館企画展示『江戸文藝文庫』展——水野稔先生の学問を偲んで——が開催された (<http://www.lib.meiji.ac.jp/about/exhibition/gallery/77/77index.html>)。

これは元本学文学部教授・水野稔先生（一九一一—一九九七）旧蔵の山東京伝の画軸・扇面・短冊など九点が、「江戸文藝文庫」に寄贈されたことを契機に催された企画展である。これらの資料を御寄贈下さったのは、水野先

生の御長女、小池奈都子さんである。寄贈資料の内容については、拙稿「山東京伝資料の寄贈について——水野稔先生旧蔵資料——」（『図書の譜』22 二〇一八・三）に記しておいた。

この企画展で、私が奈都子さんから長い間お預かりしていた先生自筆の『購入和書覚帳』も参考展示したところ、観覧者から「中身を詳しく見たい」という感想が数多く寄せられた。それに後押しされて、二〇一九年夏に、私家版ではあるが、影印資料『購入和書覚帳』（明治大学九一〇研究室 二〇一九・八）を刊行した。奈都子さんも大変喜んで下さり、この影印資料を水野先生の御郷里

である姫路市の「姫路文学館」(姫路市山野井町八四番地)に寄贈したとの御連絡を頂いた。

私も『購入和書覚帳』の公刊という積年の課題を果たして安堵したが、なおこの上は原本の保管に万全を期さねばならない。それで、奈都子さんをお願いして、『購入和書覚帳』原本に水野先生関係の資料を併せて、本学図書館「江戸文藝文庫」に御寄贈頂くことになったのである。御寄贈下さった奈都子さんには、この場を借りて心より御礼申し上げる。

「水野先生資料」の内容

寄贈された水野先生の資料は、図書館総務事務室の吉田千草氏に手配頂き、「江戸文藝文庫」の下位分類である「中央江戸文藝(水野本)」の中に「水野先生資料」(910.25/169/H)として登録されることとなった。これら資料は一括して一函の中に収められるので、以下、それぞれの資料について、内容を簡単に紹介しておくこととする。

なお、以下の資料に付した算用数字は記述上の便宜的なもので、正規の資料番号ではないので、その点、注意

されたい。

1、『購入和書覚帳』(図版Ⅰ)

この自筆本は水野先生が昭和七年から平成三年まで克明に記録してきた購入和書の目録である。原本のデジタル写真データは、JPEGとTIFFの二種を収めたCD四枚組が中央図書館マルチメディアエリアに収められている(AV/D-189/H)。

本書の内容と成立事情などについては、影印資料『購入和書覚帳』(明治大学九一〇研究室発行 二〇一九・八)を参照されたい。これには書誌と解題のほかに索引も付したので、「中央江戸文藝(水野本)」との対応も確認できるようなっている。解題はこの冊子に詳述したので、ここでは省略に従う。この影印資料は以下で閲覧できる。

- 一、「明大文庫」：090.4/U31-5/H
- 二、中央図書館開架：029.9/46/H
- 三、Meiji Repository: <http://hdl.handle.net/10291/20550>

2、「小笹文庫」印（図版Ⅱ）

この印は水野先生が兄上の忠雄氏から受け継いだ蔵書印である。もう一顆あった「水野氏／蔵書印」は、残念ながら行方不明となっているが、国文学研究資料館(<https://www.nijl.ac.jp/>)の「蔵書印データベース」には登録されている。

3、卒業論文『山東京傳―洒落本』上下二冊

これは水野先生が昭和七年に東京帝国大学国文学科に提出された卒業論文の原本である。上下二冊四〇〇字詰め原稿用紙六八〇枚。査読担当教員として、藤村作教授・橋本進吉教授・久松潜一助教授、以上三教員の名前が記された紙片が上冊表紙見返しに貼付されている（図版Ⅲ）。三名とも同筆なので職員が書いたものであろう。

テーマは、題名のとおり、山東京伝の洒落本である。この卒論は先生の終生に渡る研究の出発点となったものと言える。後に先生は筆頭編集者として『洒落本大成』全三〇巻（中央公論社 一九七八―一九八八）を完成させ、晩年には『山東京傳全集』（ベリかん社 一九九四―未完 既刊一六冊）の編纂に力を注がれた。「作家は処女作に向かって成熟する」という言葉があるが、卒論か

ら晩年に至る先生のお仕事は、文学研究においてもそれが真実であることを証している。

先生の京伝研究・洒落本研究の第一歩となった卒論の目次をここに記して、先生の歩みを偲びたいと思う（旧字体は新字体に改めた）。

「山東京伝目次

序 章 江戸作者としての京伝の特質

第一節 環境と素質

第二節 戯作生活の本質と作者生活

第三節 芸術及生活に関与せる性格の一面

第四節 江戸作者としての評価―附言

第一章 京伝の洒落本 其ノ一―作品とその展開

緒 言

第一節 天明五年及天明六年の作品

一、令子洞房 二、客衆肝照子

第二節 天明七年の作品

一、通言総籙 二、古契三娼

第三節 天明八年の作品

一、傾城觸 二、曾我糠袋 三、夜半茶漬

四、吉原楊枝

第四節 寛政元年の作品

一、廓の大帳 二、志羅川夜船 三、通気酔語伝
四、新造図臺

第五節 寛政二年の作品

一、京伝予誌 二、繁千話 三、傾城買四十八手
第六節 寛政三年の作品

一、娼妓絹籠 二、錦の裏 三、仕懸文庫

附言

附 説 寛政三年以後の京伝と洒落本

第二章 京伝の洒落本 其ノ二―内容の諸相

第一節 通の本質的発現と洒落本

第二節 特殊社会の特殊知識（穿ちの一面）

第三節 遊女及遊女生活観

第四節 遊女的生活と恋愛の諸相―洒落本の禁圧

第五節 滑稽可笑味

第三章 京伝の洒落本 其ノ三

第一節 洒落本の写実的表現とその態度

第二節 手法的特質―描写

第三節 文章―地の文

第四章 京伝の洒落本 其ノ四―影響と史的地位

結 語

4、履歷書下書き二枚（図版Ⅳ）

この履歷書の日付は「昭和十六年 月 日」と月日が空白となつてゐるので、実際に使用されたものではないが、極めて丁寧に書かれてゐる。先生は昭和一七年（一九四二）二月に仙台陸軍幼年学校を退職され、三月から陸軍予科士官学校教授となられたので、これはその頃に書かれたものかと思われる。先生二九歳の筆跡である。図版では伝わりにくいだろうが、実に端正かつ充実した筆勢で、壮年期の先生のお姿を垣間見るような思いがする。図版では判読しがたいと思われるので、左に翻字して示す。

「履歷書

本籍 兵庫県姫路市壹丁目拾壹番地

現住所 仙台市長町大道西參拾五番地

戸主 水野 稔

明治四拾四年四月拾五日生

学業

一、昭和二年三月三十一日 兵庫県立姫路中学校第四学年修了

一、昭和二年四月一日 姫路高等学校文科甲類入学

- 一、昭和五年三月十日 右 卒業
- 一、昭和五年四月一日 東京帝国大学文学部国文学科入
学
- 一、昭和八年三月三十一日 右 卒業
- 一、昭和八年四月二十八日 東京帝国大学文学部大学院
入学
- 一、昭和八年六月十五日 師範学校中学校高等女学校国
語漢文学科教員免許状下附
- 一、昭和八年九月十五日 師範学校中学校高等女学校英
語学科教員免許状下附
- 一、昭和八年十一月三十日 高等学高等科国語学科教員
免許状下附
- 一、昭和十年四月二十七日 東京帝国大学文学部大学院
退学 (一枚目)
- 「業務
- 一、昭和十年六月五日 東京市立京橋商業学校教諭二任
ス
- 一、昭和十四年三月一日 先代陸軍幼年学校教授ヲ嘱託
ス
- 一、昭和十四年三月三十一日 公立学校職員分限令第三
条第一項第二号後段ニ依り本職ヲ免ス

- 一、昭和十四年九月七日 任陸軍教授叙高等官七等 補
 - 仙台陸軍幼年学校教官 給十一級俸
 - 一、昭和十四年十月二日 叙従七位
 - 一、昭和十五年十月三十一日 給十級俸
 - 兵役
 - 一、関係ナシ
 - 賞罰
 - 一、ナシ
 - 右之通相違無之候
 - 昭和十六年 月 日 右 水野 稔 印 (二枚目)
- 5、『俠客伝初集篠斎評』筆写本(図版Ⅵ)
- これは、殿村篠斎『俠客傳初集篠斎評』と曲亭馬琴『續西遊記國字評』を先生が筆写されたものである。両書ともに東京大学付属図書館の蔵本で、蔵印から元は豊翠軒の蔵書であったことが知られる。豊翠軒石川左金吾は、殿村篠斎、小津桂窓、木村黙老とともに馬琴作品の批評グループの一人であった。
- 『俠客傳初集篠斎評』の伝来は東大本のみだが、『續西

遊記國字評』は、欄外に「この書、東大本の外には早大本がある」と先生の書入れがある。現在、この早大本は全文デジタルデータが公開されている。

この筆写本は先生が馬琴の読本研究の資料として写されたものである。先生らしい几帳面な筆跡で丁寧に書き写されている。筆写年代は不明であるが、用紙はかなり古びがっているので、私の恣意的想像に過ぎないが、昭和三〇年代ではないかと思われる。

6、『水野文庫蔵書目録 洋装本之部』（図版V）

これは『購入和書覚帳』と対をなす蔵書目録で、先生が購入された全集や叢書、単行本など活字本の目録である。昭和一三年版（一九三八）の当用日記に記されているので、その時から記入が始まったものと思われる。年号と月日が上欄外に記されているが、年代が前後はつきりしない箇所もあるので、それ以前の購入書もさかのぼって記入されているようである。

各冊には通し番号が付され、最後は「513 国書総目録 卷八」で終わっており、欄外に「四七・■（不読）」と記されている。『国書総目録』第八巻の初版は、昭和四七年（一九七二）刊行なので、この目録は、先生が還暦

を迎えた年まで記録され続けたことになる。それ以後の目録があつたものかどうかは、今となってはわからない。

また、同じ用紙をホチキス止めた別冊が挟み込まれており、それには、「原田家蔵書」とあって、通し番号は「373」まで付されている。これは先生が岳父原田虎男先生の旧蔵書を記したものである。この一事を以てしても、先生の几帳面で克明な性格がうかがい知られよう。

7、画帖『水墨花』（図版Ⅵ）

この画帖は水野文子^{ふみこ}奥様（一九二一—一九九八）が残されたものである。奥様は多趣味な方で、特に郷土人形は五千点以上もの膨大なコレクションをお持ちだった。郷土玩具コレクターの間ではよく知られた稀少品も多数あつたという。私も形見分けに数点頂き、今も机辺に飾っている。奈都子さんのお話では、その後、このコレクションは各地の郷土玩具愛好家や、個人運営の資料館など数十件に分散して受け継がれているそうである。

奈都子さんと私の共編になる水野先生遺文集『江戸文芸とともに』（ぺりかん社 二〇〇二・八）の各編扉の意匠には、この画帖から七点を選んで用いた。この度、先生の資料とともに奥様の遺品である画帖が明治大学図書

館に収蔵される。二〇二〇年に二三回忌を迎える奥様も喜んで下さっていることと思う。

8、アルバム二冊（図版Ⅷ①・②）

これは水野先生の書斎と書庫、執筆用の小部屋などを撮影した写真アルバムである。

先生の没後まもなく、私も弟子達は文子奥様の委嘱によって蔵書整理に携わった。その間に、先生の旧蔵和書は明治大学図書館に一括購入されることとなり、それが図書館に搬入されたのは一九九八年二月七日のことであった。その経緯については、拙稿「江戸文藝文庫」の創設に寄せて」（『図書の譜』5 二〇〇一・三）に記してある。

このアルバムは、蔵書のカード作成が終了した頃に、奈都子さんの御主人、智雄氏が撮影され、私どもに記念として下さったものである。先生が研究に励まれた場所の記録として、蔵書整理に通った私どもにとって懐かしいアルバムである。

以上が「水野先生資料」として保存される資料八点である。なお、これとは別に御寄贈頂いた資料が一点ある。

これは蔵書整理時には見いだすことができず、当時は図書館に送ることができなかったものである。

この度、「水野先生資料」を御寄贈頂くに際して、私が奈都子さんからお預かりしていた紙モノ資料一箱を確認したところ、次に紹介する折帖が入っていたのである。箱の中のほとんどは状態のあまりよくない浮世絵類で、図書館に寄贈するほどのものではなかったが、この資料は蔵書整理時に行方不明だっただけにたいへん嬉しい発見だった。この折帖も「江戸文藝文庫」の財産となってくれることであらう。

9、『亀田鵬斎先生書』請求記号 728.21/17/H

これは亀田鵬斎（一七五二—一八二六）の真蹟で、もとは縦長だった折本を見開きにして裏打ちをし、版型を正方形の折帖に仕立て直したものである。『購入和書覚帳』には、先生が原田虎男先生から引き継がれた「原田家旧蔵和書」の項があるが、この折帖はそこに記載され、欄外に朱字で「貴」と記されている（五〇才）。

折帖の外箱には水野先生の筆で題簽・鵬斎略歴・識語を記した紙片が貼付され、識語に「平成二年七月 水野稔誌」とあるので、先生がこれを調査した日時が知られ

る。

折帖表紙には「亀田鵬斎先生書」という、後人の筆になる題簽が貼付されており(図版Ⅸ①)、印は判読できないが、おそらくこれは折帖を改裝した人物の手になるものなのであろう。最終帖オモテには、「文化三年丙／寅冬十一月／冬至前一日／鵬斎書」(印)(図版Ⅸ②)とあるから、これは文化三年(一八〇六)、鵬斎五四歳の作である。印は上が朱文「太平／醉民」、下が白文「鵬／斎」。「太平醉民」印は誤って横向きに押されているところが御愛敬である。酒豪で知られた鵬斎の粹余の作かもしれない。この折帖の最終帖ウラには「原田／図書」の蔵印があり、『購入和書覚帖』にあるとおり、原田先生遺愛の品であったことがわかる。

以上、この度、御寄贈頂いた「水野先生資料」と『亀田鵬斎先生書』のあらましを紹介してみた。先生由縁の品々が図書館に収蔵されることは、弟子としてまことに嬉しい限りである。長年お預かりしていた先生の遺品を後世に伝えることができ、私の積年の気がかりもやっと晴れた。弟子としての務め的一端を果たして、心底安堵している。

長い間、資料を私に託して下さり、また、今回の寄贈を御快諾頂いた奈都子さんには改めて感謝申し上げますとともに、寄贈を受け入れて下さった明治大学図書館に心から御礼申し上げる次第である。

おわりに

最後に私事を記すことをお許し願いたい。私が水野先生の授業を初めて受講したのは、学部二年生の時である。そして、先生を指導教授として大学院に進学し、博士前期課程を修了したのは、昭和五八年(一九八三)三月のことであった。先生はその一年前に既に御定年を迎えられていたが、引き続き講師として出講されていたので、私はギリギリのところまで先生最後の直弟子になることができたのである。

先生がお亡くなりになったのは平成九年(一九九七)八月一九日のことである。先生の御逝去から二二年を閲するが、先生は今でも学問の導き手として、私の中に生き続けている。この度、先生を偲ぶ資料が「江戸文藝文庫」に収蔵されたことは、我が事のように嬉しい。先生の旧蔵和書を中核とする「江戸文藝文庫」が、今後とも

末永く後学を裨益していつてくれることを心から願って
やまない。

(二〇一九・一一・一一)

*うちむら かつし／文学部教授 二〇一九年度「江戸
文藝文庫」選定分科会座長

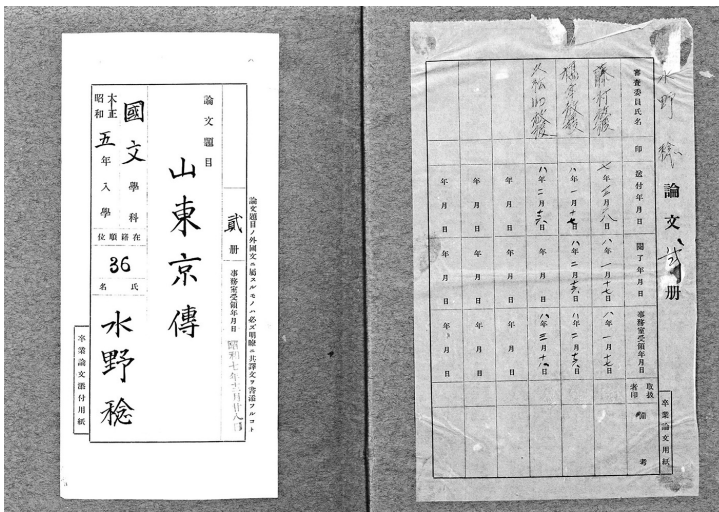
図版Ⅰ 『購入和書覚帳』表紙



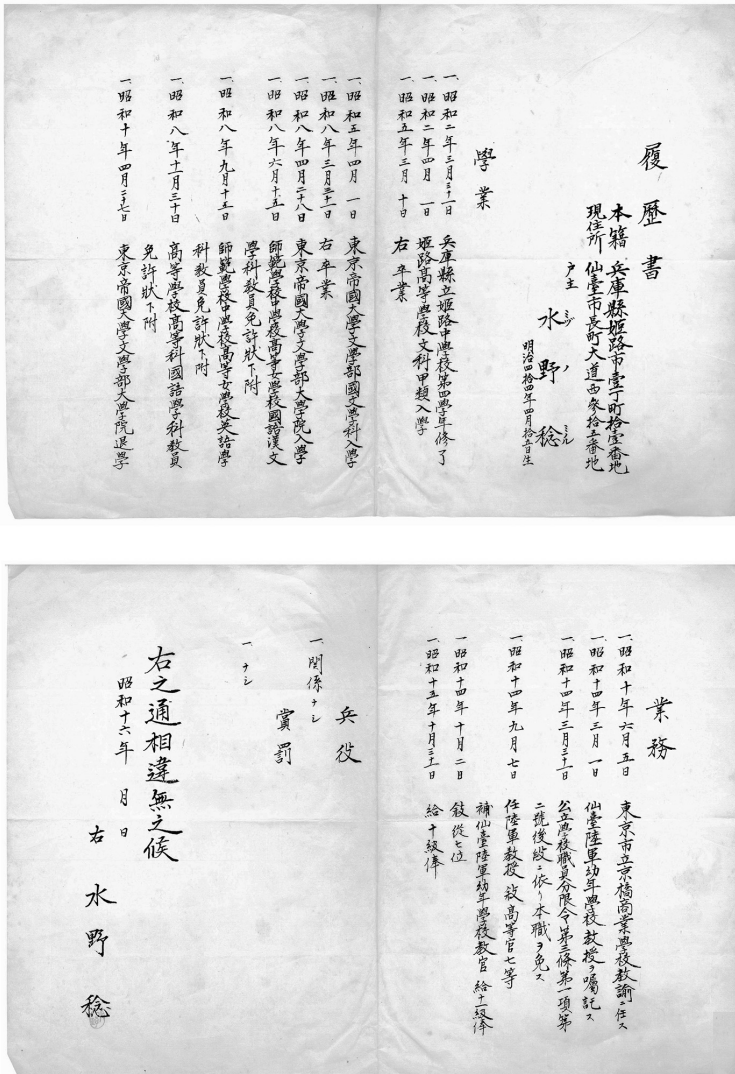
図版Ⅱ 「小笹文庫」印



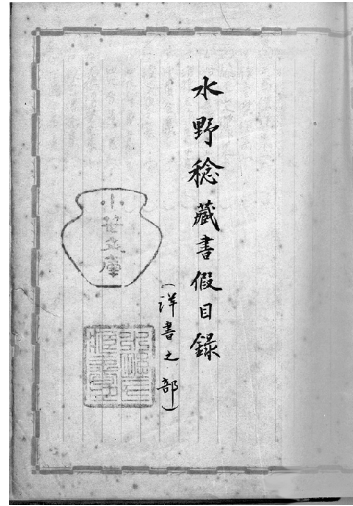
図版Ⅲ 卒業論文上冊表紙見返し



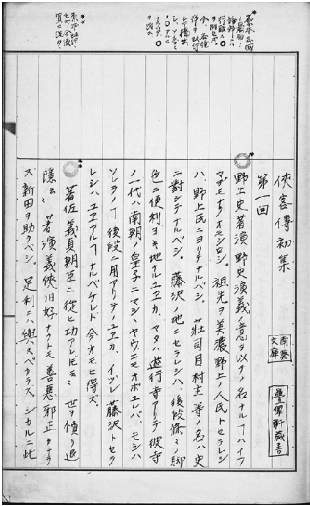
図版Ⅳ 履歴書下書き



図版Ⅴ 『水野文庫蔵書目録 洋装本之部』扉



図版Ⅵ 『侠客伝初集篠斎評』筆写本二丁表



図版Ⅶ 画帖『水墨花』より「藤」



図版Ⅷ 『アルバム』より

① 曲亭馬琴和本棚

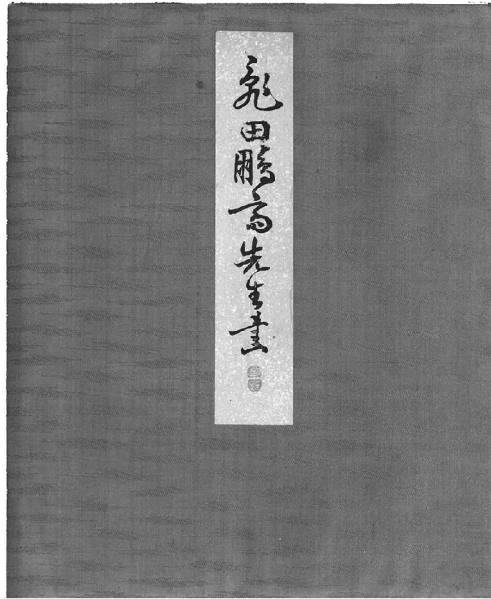


② 書庫の一角



図版Ⅹ 『亀田鵬斎先生書』

① 表紙



② 最終帖オモテ

